

周年放牧生産子牛の生時体重及び体尺測定値と肥育成績との関係

伊 東 繁 丸

目 的

入来牧場では黒毛和種を周年放牧方式により子牛を生産し、肥育を行っている。肥育牛の産肉成績は肥育経営に大きく影響を及ぼすことから、特に、一貫経営では生時から肥育終了時までについての検討が必要である。そこで、本研究では生時から肥育出荷時までの発育値や産肉成績を調査し、分娩時から出荷時までの飼育管理上の基礎資料を得ようとした。

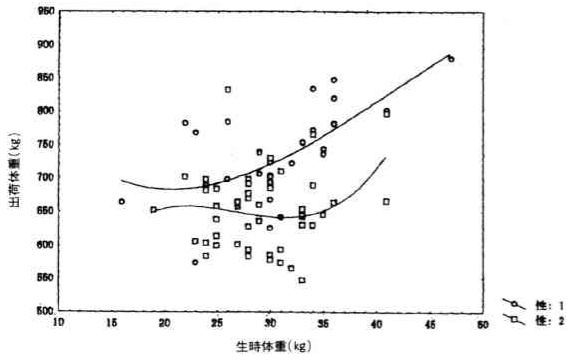
材料と方法

周年方法で生産した黒毛和種子牛を1996年7月～1998年11月の間に土着菌発酵床で肥育し、出荷した159頭（雌99頭、去勢60頭）について、分娩時から出荷時までの測定値（生時体重、生時胸囲、吸乳期 DG、離乳時体重、育成期 DG、肥育開始時日齢、肥育終了時体重、ロース芯面積、肥育月齢および肥育牛価格）の相互関係を検討した。

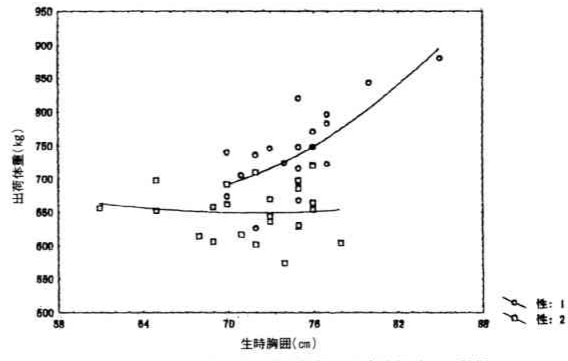
結果と考察

去勢牛では生時体重が大きいほど、肥育終了時体重も大きくなる傾向を示した、雌では一定の傾向は認められなかった（第1図）。生時体重は母牛の妊娠末期の栄養状態に影響するといわれており、生時体重が30kg以上で生ませるための栄養管理が重要であると考えられた。生時胸囲と肥育終了時体重との間では、特に去勢で生時胸囲が70cm以上で大きくなるほど肥育牛の出荷時体重も大きくなる傾向が認められた（第2図）。生時体重と肥育終了時価格との関係では、特に、去勢で生時体重が大きい程販売価格が高くなる傾向が見られた（第3図）。離乳後育成期 DG と肥育牛ロース芯面積との関係では、去勢では離乳 DG が大きいほど、育成 DG は0.8kg程度でロース芯面積が最も広くなる傾向が認められた。一方、雌では離乳時および育成 DG が大きいほどロース芯面積が広くなる傾向が認められた（第4図）離乳時 DG および育成期 DG と出荷体重との関係を見ると、離乳 DG が大きく、育成期 DG が0.8～1.0kg程度で出荷体重が最も大きくなる傾向が認められた（第5図）。肥育開始日齢、肥育終了時月齢および肥育終了時価格の関係では、去勢及び雌とも肥育終了時月齢が32ヶ月程度で販売価格は高くなる傾向が認められた。しかし、肥育開始日齢は去勢牛では一定の傾向は認められなかったが、雌では開始日齢が遅くなるほど販売価格は高くなる傾向が認められた（第6図）。

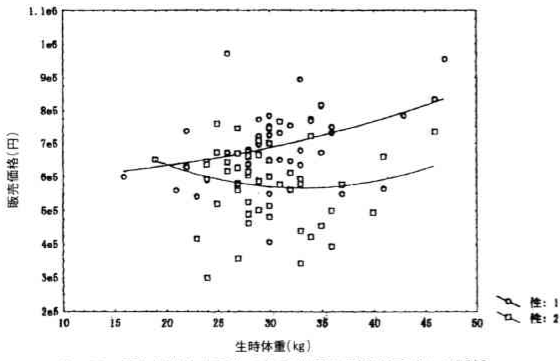
以上を要約すると、妊娠末期の母牛の適正な栄養管理により生時体重を大きくすること、離乳時 DG はできるだけ高め、育成期 DG を0.8～1.0kg程度にすること、肥育終了月齢は32ヶ月程度にすることが、現状の周年放牧生産牛の肥育技術では適切であると考えられた。



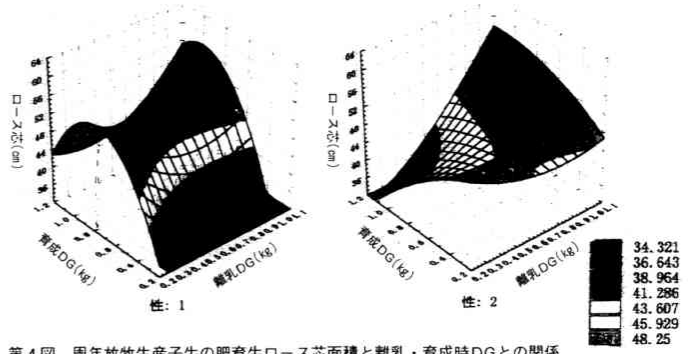
第1図 周年放牧生産子牛の生時体重と肥育終了時体重との関係



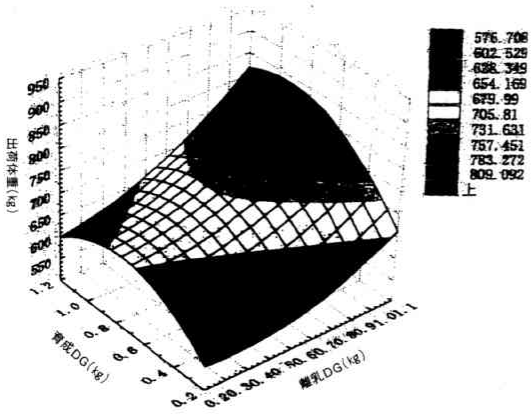
第2図 周年放牧生産子牛の生時胸囲と肥育終了時との関係



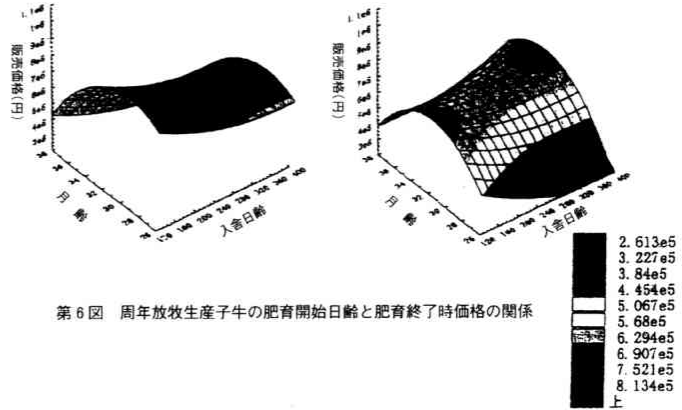
第3図 周年放牧生産子牛の生時体重と肥育終了時との関係



第4図 周年放牧生産子牛の肥育牛ロース芯面積と離乳・育成時DGとの関係



第5図 周年放牧生産子牛の初期発育と肥育牛出荷体重との関係



第6図 周年放牧生産子牛の肥育開始日齢と肥育終了時価格の関係